

“令和七年”

「夏の回想」

「時代の変遷」

鎌倉の地を歩き始めたのはいつの頃からか、思えば半世紀以上も前に遡るのかもしれない。当初は物見遊山で、振り返ることもなかったが、今にして思えば、ただ何となく心が癒されたのかもしれない。

当時の東京は、戦後の復興を成し遂げ、世界に羽ばたけとばかりに昭和三十九年（1964）の新幹線開通や東京オリンピック開催に弾みをつけ、経済は高度成長期にむけ、日本全体が走り出し、GNP 世界第二位の大国に向け活気溢れる時期でもあった。

しかし、その反動からか、東京から青空は消え終日スモッグの世界となり、また、隅田川からは異臭が発生し経済発展の副作用が大きく顕著に表れ社会問題化されて

きた。

労働界では週一の休日も儘ならない長時間労働がなんの不思議でもないように行われてきたが、日本経済の成長がアメリカ始め世界各国に知れ渡ってきたのか、労働に対する考え方も変化し、特にパソコンの移入が世の中を一変させる兆候となってきた。

また、為替相場の大変革が訪れるようになり、輸入品目などは外圧による規制緩和なども急激に始まり、モータリゼーションの普及やスーパーマーケット、コンビニエンスストアなどの出現により、向こう三軒両隣の江戸時代から続くパママ店の撤退消滅は日に日に目を覆うように消えていくようになった。

戦後から数えて昭和四十五年（1970）くらいまではまだまだ、算盤が健在であったが、感情を一切挿まないパソコンの急激な浸透は、ソロバン勘定を減速させ、また、世

の中から「義理と人情」の世界を自然のうちに衰退させてしまったのかもしれない。

このように半世紀前の身の回りの事象を書き連ねましたが、戦後八十年経た日本の令和七年は、東京では青空が戻り、隅田川も浄化され人々の憩いの場となってきたつあります。

また、半導体の進化は止まることを知らず、スマホによる生活革命や、地球の裏側の世界までもが、向こう三軒両隣になりつつあり、さらに中国、インド始めアセアン諸国の経済発展も目覚ましく、近年の日本はGDP 世界第三位と後退し、躍進するインドやインドネシアの後塵も後々には拝するという時代も近いと経済界では予想されているようです。

「鎌倉回想」

平成十八年（2006）二月、これまで心を癒されてきた鎌倉を訪ねるグループに出逢い、

「鎌倉は任せてー」とばかりに知ったかぶりの案内をさせていただきましたが、その時のガイドは通りいっぺんのものとなり、自分の中に不満の塊が重くのしかかり反省に陥り、次回からは、時代の物語を載せたガイドができるようにと鎌倉時代の歴史を調べ始めました。鎌倉ガイドのキッカケを作ってくれた最初のグループには終生感謝していかねばならないと決めています。

ここで、ラッキーにも「永井路子先生」の「私のかまくら通」が目に入り、そのタイトルや文章の美しさに魅了され、実際に歩いてみようと思い実行してみました。歩きはじめて気が付いたことは、鎌倉全体が歴史の塊として捉えられ、鎌倉という都市の誕生から知らされ、さらに日本の政治体制の大変革の時代でもあったということもわかり、心の鼓動が高まるばかりでした。

『鎌倉』という都市名の由来伝説、源頼朝が何故、武家政権を成立できたのか！、鶴

岡八幡宮の創建はどうして！、何故、大イチョウの処で「実朝」が暗殺されたのか？また、その犯人捜しは！、何故、北条家による執権政治が始まったのか！、何故、建長寺・円覚寺などの大寺ができたのか！

などの疑問が山ほど立ちはだかり、その理解をしなければ鎌倉のガイドは難しいと思い、当初は戸惑いを感じましたが、なんとか勉強をし始めることとしました。幸いにして、材木座の長勝寺さんの副住職高橋寛郎上人様の奇遇も得て、少しずつ鎌倉の成り立ちについての知識が深まってきました。

その一例

「建長寺の私的物語」

鎌倉五山の第一位建長寺の創建は、建長五年（1253）鎌倉幕府第五代執権の「北条時頼」が開基となり、南宋の禅僧・蘭溪道隆の開山によってなされました。

現在の建物は江戸時代のものですが仏殿・法堂が禅寺の様式に則って建っている。本

尊は、建長寺が建立する前の立ち位置は鎌倉の墓地であったと伝わっていることから私的に考えた「地藏菩薩」が祀られています。

また、創建時に蘭溪道隆が植えたと伝わる柏槇（ビャクシン）の大きな古木が七百五十年の時を経て緑の枝を茂らせていることには感嘆せざるをえません。春にはサクラ・牡丹の美しさも見逃せません。

その他、仏殿は江戸・増上寺の秀忠夫人・お江（崇源院）さんの「御霊屋（おたまや）」を移築されたもので、方丈入口の唐門も崇源院御霊屋から移築されている。

それから、私的に興味深いのは、境内に江戸時代初期の豪商「河村瑞賢」の墓所があり、瑞賢とその子息・通頭が鎮まっています。六月十六日には「瑞賢忌」が墓前にて行われているということです。私が訪ねたのは令和四年の秋でしたが、少し荒れて寂しく感じられました。疑問として河村瑞賢家の継承はなされているのだろうか？というこ

とでした。

それはさておき、何故、建長寺境内に墓所があるのか、まだ納得のゆく答えは見つかっていませんが、河村瑞賢は建長寺に対し相当の寄進を行ったものと考えるのが妥当と思います。少し調べてみますと、河村瑞賢(1618-1699)という方は伊勢の貧農の出身で、大志を抱き十三才のとき江戸へ入ります。

ウィキペディアなどで概略ですが、調べますと、江戸の奉公先は土木関係に携わりますが、なかなか思うようにはいかず、郷里に帰ろうとします。

品川湊に着いたときは、丁度、お盆の時で送り盆の下げ物のキュウリや茄子が川面に浮かんでいた。そこで閃いて、乞食などに手伝ってもらい、そのキュウリや茄子を拾い集めて、浅漬けを作り、これを江戸市中に販売し大儲けしたと書かれています。

そして、その資金を基に材木商にのし上がっていきます。箱根の誰も購入しない山奥の木材を安く買いたたき、冬季に伐採し、

春には雪解けの雪を滑り台として活用し山から雪解けの水で水流の増した川へ引き落とし、それを江戸へ運び莫大な財を成していく。

さらに四十才の時に発生した明暦の大火(1657)ではいち早く、木曾福島の材木の買い占めに走り、この土木業で莫大な利益を上げたという。

寛文十一年(1671)には、米どころの酒田地方など全国の年貢米を江戸に集積するための東回り、西回り航路の開発を行い幕府の御用商人となって行く。

そして、小田原藩・稲葉正則藩主に取り入り幕府の治水事業にも乗り出していく。延宝二年(1674)には、大阪淀川の治水工事で、安治川の開削工事を行い、それは現代までも使用される立派な水路となっている。その功績のためか晩年には「旗本」に列せられたとなっています。

江戸におけるお屋敷は、霊岸島(現在の中央区新川一丁目八番地域)に土蔵四棟をもった豪壮な屋敷であったという。

現在この場所に「河村瑞賢屋敷跡」として、中央区教育委員会の説明板が建てられている。それによると、

「江戸時代、この地域には幕府の御用商人として活躍していた河村瑞賢の屋敷がありました。瑞賢は明暦三年(1657)の江戸大火の際には、木曾の材木を買い占めて財をなし、その後も幕府や諸大名の土木建築を請負い莫大な資産を築きました。また、その財力を基に海運や治水など多くの事業を行いました。」

瑞賢の業績の中でもとくに重要なのは、奥州や出羽の幕領米を江戸へ回漕する廻米航路を開拓し輸送経費・期間の削減に成功したことや、淀川をはじめとする緒川を修治して畿内の治水に尽力したことがあげられる。」と書かれている。

以上が「鎌倉の思い出」の一端として残暑のなか書いてみました。ご笑覧いただければ幸いです。

完